2015年4月17日（金）　NEW

元乗組員が語る　戦艦武蔵の最期

ツイート　シェアする　チェック　共有する
※NHKサイトを離れます

阿部
「先月（3月）、アメリカ人の資産家によって、フィリピン沖1，000メートルの深海で発見された戦艦武蔵。
昭和19年、アメリカ軍の猛攻をうけ、1000人の乗組員と共に沈みました。」

和久田
「不沈艦と呼ばれた武蔵はどのような最期を遂げたのか。
元乗組員たちの証言でたどります。」

元乗組員が語る　戦艦武蔵の最期

武蔵の元乗組員、大塚健次さん。
70年あまりたって武蔵の姿を再び目にし、仲間の悲惨な死が頭をよぎりました。

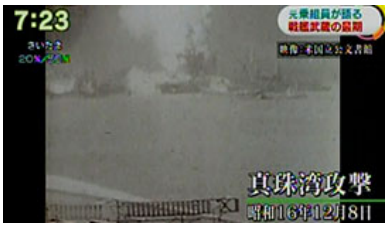
武蔵　元乗組員　大塚健次さん
「見つかってよかったという気持ちもいっぱい。
でも中に入っている、多くの人が。」

昭和17年、当時の技術の粋を集めて完成した武蔵。

最大の武器は、世界最長の射程を誇る主砲。
40キロ以上離れた敵の艦船を撃沈できる威力がありました。

建造に関わった　田中徳幸さん
「特異な船だった。
板の厚みから違う。
先輩が自信を持って言った、『この船は魚雷で沈まないぞ』と。」

しかし、すでに戦艦が主役の時代は終わろうとしていました。
武蔵が完成する8か月前の真珠湾攻撃。
アメリカの艦船に大きな打撃を与えたのは、日本の航空機部隊でした。
航空戦の重要性を認識したアメリカは、急ピッチで空母を建造。
航空機部隊で日本を圧倒していきました。



太平洋の日本の拠点は次々と陥落。
アメリカはフィリピンに迫ります。
フィリピンは、南方から石油などの資源を日本に輸送する重要な拠点です。
日本は武蔵を投入し、戦局の打開を図ろうとしました。
「レイテ沖の海戦」。
上陸しようとするアメリカ軍を、巨大な主砲で撃退するのが武蔵の任務でした。

際限なく奪われた命　戦艦武蔵の最期

昭和19年10月24日。
大和と共にレイテにむかう武蔵。
午前10時頃、アメリカ軍の航空機部隊が襲いかかってきました。

空からの攻撃を警戒する防空指揮所。
そこで任務にあたっていた大塚さんは、容赦ない攻撃を目の当たりにしました。

武蔵　元乗組員　大塚健次さん
「次から次へと魚雷、爆弾、魚雷、爆弾、また魚雷と攻撃されると、もうよけきれないというような状態。」

レイテ沖の海戦に先立って、武蔵の甲板には敵の航空機を迎撃する機銃が増設されていました。
急きょ設置したため、中には土のうで囲っただけの機銃もありました。

武蔵　元機銃員　千木良礼一さん
「対空機銃でやる時は『食うか食われるか』だった。
一騎打ちというか、ずっと本当に自分で向かってくる。

爆弾を落とすだけじゃなく機銃を撃ちながら来る。」

今回の取材で、20年前に録音された元乗組員たちの証言を入手しました。
当時の生々しい戦闘の様子が克明に語られています。

話：武蔵　元乗組員　小高則律さん
「敵の飛行機も、ものすごい勢いで機銃に突っ込んできて、爆弾の落ちた周囲の機銃員は銃座ごと飛ばされたり、機銃員はもうほとんど全滅に近い状態になってしまって、手足ばらばら、ものすごい惨状を呈している。」

話：武蔵　元乗組員　遠藤義正さん
「（機銃員の）連中がばたばた倒れていく。
血しぶきが私の窓ガラスにばっと飛んでくる。
それが赤くない、真っ黒になる、焼けてしまって。
そうすると生きている連中が、死んだやつを露天甲板に投げ下ろす。
邪魔になるから。」

武蔵の機銃員が次々と命を落としていく一方、アメリカは脱出したパイロットを海上で救助する態勢を整えていました。

話：武蔵　元乗組員　遠藤義正さん
「パラシュートで脱出するのもアメリカの潜水艦が外かくにいて待っている、救助するために。
アメリカという国は兵隊を大事にする。」

戦闘開始から5時間余りたった午後3時。
とどめをさす爆弾が、幹部が指揮を執る艦橋に落とされました。

武蔵　元乗組員　大塚健次さん
「落とした、爆弾投下って、信管が抜ける音がシャシャシャシャ、『投下！』と言ったときダーッときた。
4メートルくらい脇にいた少佐、その方は顔面にあたって首が落ちた。
本当に気の毒だ。
その時は本当に『これが戦争か』と。」

魚雷と爆弾、20発以上を受け大きく傾いた船体。
午後4時頃、乗組員が甲板に集められました。
告げられたのは副長による、「武蔵を守れ」という命令でした。

話：武蔵　元軍医　細野清士さん
「『本艦は長い年月とたくさんの費用をかけてつくった不沈艦である、絶対に沈まない』と。
『今、船が傾いているのでそのために重いものを全部右舷に運べ、本艦を見捨てるようなことをしてはいけない』という訓示だった。」

話：武蔵　元乗組員　前多孝二さん
「ここ（甲板）の重量物はかなりのもの、兵隊を押しつぶして転がりだした。
ごろごろびしゃびしゃ、もう地獄、阿鼻叫喚（あびきょうかん）。
それを見て初めて副長が初めて『飛び込め、総員飛び込め』。」

午後7時35分。
武蔵は大爆発を起こし、1，000人の乗組員とともにフィリピンの海に沈んでいきました。
70年ぶりにその姿を現した戦艦「武蔵」。

際限なく命が奪われていった現実を、今に語りかけています。

際限なく奪われた命　戦艦武蔵の最期

阿部
「スタジオには、呉市海事歴史科学館・大和ミュージアムの館長で、日本海軍の研究をされている戸高一成さんにお越しいただきました。
乗組員が命を失っていく様子、壮絶なものでしたが、改めて戦争の悲惨さが伝わってきますね。」

大和ミュージアム　館長　戸高一成さん
「戦争はもともと悲惨なものですけども、この日本の考え方にも無理があったんですね。
国力の隔絶したアメリカのために、この日本の兵器というのは攻撃力を重視して、防御力を軽視するという傾向があったんですね。
このために非常に無理な戦いになり、また、最新鋭と言われた戦艦武蔵に土のうで囲った機銃を置かなければいけないと、そういう状況になったのが悲惨さを招いた原因だと思います。」

阿部
「日米の戦い方にの意識の違いも浮き彫りになっていますね。」

大和ミュージアム　館長　戸高一成さん
「そうですね、アメリカは兵士を守るために、作戦を立てるときには物資の補給、戦闘中の兵士の救助の計画、そういったものが全て整って作戦になるんですね。
日本の場合、そういうものが等閑視されたということがあって、それがまた武蔵の戦闘の悲惨さにつながったんだと思います。」

戦後70年　武蔵からのメッセージは

和久田
「戦後70年の今年、姿を見せた武蔵ですが、私たちにいったいどんなメッセージを発していると受け止めてらっしゃいますか？」

大和ミュージアム　館長　戸高一成さん
「私はこの70年という時間を考えたときに、太平洋戦争が本当に忘れられていく時間があるんですね。
これが、忘れてはいけない、本当に改めて戦争を考えなければいけないというメッセージを、私たちに強く与えてくれたんだというふうに考えています。」

阿部
「そして証言を聞けるのは、この戦後70年、最後のチャンスと言ってもいいかもしれませんね。」

大和ミュージアム　館長　戸高一成さん
「そうですね、ここで本当に私たちはもう1回、戦争でどんなことがあったのかというのをきちんと考え直さなければならないと考えています。」

Copyright NHK (Japan Broadcasting Corporation). All rights reserved. 許可なく転載することを禁じます。
ご意見・お問い合わせ ｜ NHKにおける個人情報保護について ｜ NHK著作権保護 ｜ NHKオンライン利用上の注意 ｜ 番組表 ｜
このページは受信料で制作しています。